

加賀乙彦著

死刑囚の記録



中公新書

565



中公新書 565

加賀乙彦著
死刑囚の記録

中央公論社刊

加賀乙彦（かが・おとひこ）

1929（昭和4）年，東京に生まれる。

1953（昭和28）年，東京大学医学部卒業。

作家・精神科医。

著書『フランドルの冬』（新潮文庫）

『荒地を旅する者たち』（新潮社）

『帰らざる夏』（講談社文庫）

『ドストエフスキイ』（中公新書）

『宣告』上・下（新潮文庫）

『錨のない船』上・中・下（講談社文芸文庫）

『湿原』上・下（新潮文庫）

『岐路』上・下（新潮社）

『ヴィーナスのえくぼ』（中央公論社）他。

死刑囚の記録

中公新書 565

© 1980年

検印廃止

1980年 1 月25日初版

'990年 12 月20日19版

著 者 加賀乙彦

発行者 嶋中鵬二

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替東京2-34

目 次

第一章 ある殺人者との出会い……………2

- I 松沢病院にて 2
- II 詐欺師と殺人者 12

第二章 東京拘置所ゼロ番区……………17

- I 小菅の拘置所 17
- II 最初の死刑囚 22

第三章 独房の現実と夢……………32

- I 闘う被告 32
- II 無罪の主張 45
- III 被害妄想の世界 56

第四章 刹那主義の人びと……………76

- I 陽気な死刑囚 76
- II 不安といらだち 87

Ⅲ 生への欲望

108

第五章 冤罪を主張する人たち……………133

Ⅰ 不安と惑乱の日々——三鷹事件の竹内景助……………133

Ⅱ 隠者の風格——帝銀事件の平沢貞通……………146

Ⅲ 拷問と誘導訊問——幸浦事件の三人……………156

Ⅳ 獄中の学者——牟礼事件の佐藤誠……………164

第六章 鉄窓の宗教者……………170

Ⅰ 戦後の日々と神——メッカ事件の正田昭……………170

Ⅱ 幼き日の影——横須賀線爆破事件の若松善紀……………194

第七章 死刑囚と無期囚……………204

Ⅰ 拘禁ノイローゼ……………204

Ⅱ 死刑囚と無期囚の時間……………218

あとがき……………229

死刑囚の記録

第一章 ある殺人者との出会い

I 松沢病院にて

一九五四年十月下旬の午後、都立松沢病院の外来診察室で、私は一人の奇妙な男に会った。男は、紺の制服に身を固めた看守三人に小柄な体を両側とうしろから支えられていたが、まるで全身の力が抜けたようにへなへなと腰をおろした。

蒼白な顔は、やつれて猿のように皺が寄り、しかも顔中の筋肉がこまかく震えていた。額にある、大きな擦り傷が痛々しく赤かった。

大石光雄、それが男の名前だった。大石は強盗殺人、窃盗、詐欺という複合犯罪をおかした犯人として東京拘置所に収監されていた被告だった。ところが一審の裁判中、だんだんに気が変に

なり、ドアをけったり、食事をとらなかつたり、突然失神したりするため、精神異常者として、松沢病院に送られてきたのだった。

彼は私が初めて見た殺人者であった。殺人者といえは筋骨たくましく、冷たく威圧するような人間を想像していた私には、男の弱々しい様子が全く意外に思えた。私は男の名をよんで診察しようとした。が、何を尋ねても、男は「ウウウウ、アアアア」と言うだけで答えない。

「とにかく入院させましょう」と言い、私は先に立って案内をした。病棟の手前に来て、不意に男は大声をあげ、看守におさえられた腕をふりきって逃げようとした。今までへなへなしていたのが信じられないほど、敏捷な身のこなしであった。何とか取り押えて、病室内へと連れこんだが、頭を壁にぶつけ、ドアをたたき、意味不明の叫びをあげて暴れくるった。やがて、ぐったりとして静かになった。何度呼びかけても依然答えない。

何だか気になったので、その夜は病院に泊ることにした。案の定、午前一時すぎ、病棟から緊急の電話があった。男が大暴れしているというのだ。駆けつけてみると、男の小さな体全体が、自分の意思では統御できぬ力が入りこんだかのように、やたらと震えながら突っ立ち、男はあたかも目の前の誰かと喧嘩でもしているように睨みつけ、怒鳴り、と思うと相手を追うように走り寄っては腕をふりまわした。三十分ほどそんな状態が続いたが、男は、ばたきと仰向けに倒れ、両脚両腕をぐっと伸ばすと、はげしい痙攣けいれんをおこした。顔は充血してまっ赤で、汗みずくだ。

精神医は、こういう場合、**癲癇性**^{てんかん}の大発作かヒステリー性の痙攣発作かと診断しようとする。

その年の四月に精神医としての経歴を始めたばかりだった私は、まだそれほど多くの症例を見たことはなかったけれども、これこそヒステリーだと見分けられた。倒れかたといい、体を弓なりにそらせた恰好（これを「弓なり緊張」という）といい、全体がどこことなく芝居じみていて大袈裟な感じといい、教科書の記述どおりだった。ただ、あんまり教科書どおりだったので、かえって疑わしく思えたほどだ。と言うのは、近年ヒステリーのような原始的な発作はだんだんにすくなくなり、あったとしても典型的な「弓なり緊張」はまず見られないと先輩の医者から教えられていたからである。

ヒステリー発作なら生命に別状はないし、ほうっておけばやがて直るはずと、私はじっと観察していた。男は立て続けに三回弓なり緊張の発作をおこしたあと、うつぶせになり、額で床をたたき始めた。額の傷が破れて血が出たので、たすけおこすと鼻血を出していた。「チクシヨウ」「この野郎」と叫び、一時間ほど興奮したすえ、やっと静かになった。

翌日、病室内でぼんやり立っている。それでも、周囲に目くばりはしているらしく、私が近付くとすぐこちらを見た。頭をこまかく震わせ、口をぎゅっと結び、緊張のていである。

「あなたの名前は」と私は尋ねた。

男は、「オ、オ、イ、チ」と子供のように一語一語を区切った回らぬ舌で答えた。はじめて男

が答えたので、いろいろと質問してみたが、そのあとは全くの沈黙で、私を看守か警官と間違えたように不安そうに見ているのみだ。やっと十分後に、年齢をたずねると「ニ、ジュウ」と答えた。男は一九二七年生れで、二十七歳だから、この答は七歳ずれていた。この傾向はすべての質問に対してあり、生育地が静岡なのに清水、今日は十月二十五日なのに九月二十一日、二たす三は六、三たす四は九という具合であった。

要するに、質問に対して正解とすこしずれた答をするのであった。男は子供のように舌足らずに話し、どこことなく呆けた様子である。

この症状をガンゼル症状群と言い、刑務所に拘禁された囚人に特有の反応であると私に教えてくださったのは、病棟の受持医であった中田修先生である。中田先生は東京拘置所の医官をしたあと、松沢病院の医員となった人で、拘禁反応について詳しかった。

ガンゼル (S. Gansel) はドイツの精神医学者で、十九世紀末、未決囚に奇妙な患者を発見した。患者は、ごく簡単な質問に対して、わざとのように間違った答をする。この場合、答は一応質問のめざす方向にはあるが、正確ではない。患者には意識の曇りがみられ、不安で当惑した表情を示し、どこことなく道化じみた感じである。

大石光雄がガンゼル症状群であったと知った私は、刑務所内でおこる拘禁ノイローゼについて興味をもった。その方面の文献を中田先生の指導で読んでみると、ふつうの精神病院ではめった

に見られぬ、さまざまな反応が刑務所にあることが分った。中田先生自身の論文には、日本において発見された拘禁反応の種類や頻度が記されていた。拘禁ノイローゼは既決囚よりも未決囚に多く、雑居拘禁よりも独居拘禁に多いのだった。この条件は大石の場合ぴたりと符合した。

大石は二週間もするとガンゼル症状群も解け、会話もほぼ正常にできるようになった。人なつっこく、微笑をうかべて私に挨拶し、ほかの患者ともよく付き合い、花札をしたり談笑したりした。しかしときどき、興奮して大声で叫んだり、歯ぎしりすることがあった。

このあいだに明らかになったのは、大石が、幹本という男に対して憎しみを示し、この幹本こそ真犯人で自分は冤罪だと主張していることであつた。この話題に及ぶと、大石の目付はにわかに険しくなり、緊張した様子で用心深く話した。ある日、彼は、拘留所で書いたという上申書の原稿を私にみせた。それはミノ紙五十二枚にペンでこまごまと書かれていて、起訴された犯罪が実は全くの無実の罪であることが縷々^る述べられていた。

大石がおこなつたとして起訴された事件は、強盗殺人一件、詐欺二件、窃盗一件である。詐欺事件は、知人の洋服問屋から紺サージ二十本を借りて無断で売りはらってしまったり、株式代金をだまし取ったりしている。窃盗事件は下宿の主婦の留守中に蒲団や毛布を持ち逃げした。

強盗殺人事件は、一九五三年九月二十三日におこつた。赤羽の七十二歳のパチンコ店主中川某から五万円の借金を返済するようにせまられ、借金の担保にしていた紺サージの洋服生地を売っ

て金をつくろうと交渉したが、店主と口論になり、金槌で頭をめった打ちにして殺害、貯金通帳や現金二千六百円を奪ったものである。口実を作って大石が外出させていた店員がもどってきて犯行が発覚した。

ところが上申書によると、真犯人は第三国人で本名をジョンといい、密輸を手広くやっている内海という男と、その子分の幹本という男だとなっている。犯行当日、大石は幹本にたのまれて密輸品を中川パチンコ店に受け取りにいった。まず、かねて命じられていたように、店員にでたらめな手紙と地図を渡し、パチンコ機械の部分を取りに使いに出すと、外に待っている幹本と連絡するため赤羽駅前の所定の場所へ行ったが、姿が見えず、付近を探すうち、映画館前の暗い角に自動車が止っていて、誰かが大石を呼んだ。自動車は鼠色の高級車で、中に内海と女がいた。内海は「こんなところでぐずぐずせず早く中川の店へ行け。早く手伝うんだ」と言った。そこでパチンコ店へ行ってみると、パチンコの機械が一台はずしてあり、その奥に幹本が立っていた。前には顔を赤く染めた男が倒れ、うなっていた。幹本は、大石に血まみれのハンマーを手渡した。あと、大石は幹本に言いくるめられ、罪をきれば百万円をやる、あとから助けだすというので、警察に逮捕されたときも最初は内海や幹本の名前を出さなかったという。

右のように要約すると何だかあっけないが、上申書の記述は細部まで生きいきとされていて、犯行当夜は雨が降っていて傘をパチンコ店の入口に置いたことや、被害者の前にハンマーを持って

立つ幹本の形相など迫真の描写であった。

この上申書を書いているうちに、真犯人である二人の男が憎くなり、日夜二人を呪っているうちに、大石は頭が変になり、次第に記憶がぼんやりしてきた。入院時看守に付きそわれてきたのは覚えていない、私に問診を受けたことはぼんやり覚えている、という。

入院当夜の興奮状態については次のように答えた。「そばに内海、幹本が現われて笑うんで、『手前たちが殺^やったんじゃないやねえか』となぐりつけると、二人の姿がすつとうしろに遠のいたんです。あとを追いかけると、壁のむこうに二人が消え、額を壁にぶつけてしまいました」つまり興奮したのは幻覚を見たからだというわけだった。

大石光雄に毎日会い、経過を詳しく観察するにつれて、私はこの小男に同情するようになった。ガンゼル症状群を示す激烈なヒステリー発作は、いつに真犯人に対する強い憎悪からおこっている。それはついに幻覚と強い興奮状態までひきおこした。これが私の判断であった。

毎週一回新入患者を院長に診察してもらい、全医員が集る会合で私は述べた。「真犯人が逮捕されない以上、本人の心因反応は治らないと思います」

ところが、事態は急転直下、妙な結末をむかえたのである。

十二月末、私は東京地方裁判所から大石の一件書類を借りてきて通読してみた。そうすると、あらゆる物的証拠が、大石の単独正犯を証明していて、内海や幹本なる人物はまったく架空の人

物であるとは思えなくなった。犯行当夜映画館前に鼠色の車があったという目撃者もなく、まして内海や幹本は警察の熱心な聞きこみでも発見されず、事件当夜持ち出したという密輸品の入った箱についても、その前夜まで被害者と寝起きしていた店員の供述により、実在しないものであることが明らかにされてきた。

そこで、私は経過を再検討してみた。

大石は逮捕後、警察官や検察官に対して犯行を自白した。しかし、拘置所に入所後、自分の犯した強盗殺人が死刑に値する重罪であることに気づき、架空の犯人を必死で考え出した。この段階では本人は意識して嘘をついていた。が、上申書を読んでみた私がうっかりだまされてしまったように、嘘を本当に見せかける空想力は、どうして、したたかであった。ところが、公判廷において、その程度の嘘は具体的な証言や訊問でくずされてしまう。虚言の無力に動転した大石はついにガンゼル症状群をともなうヒステリー反応に逃げこんだ。

しかし、大石の場合、内海と幹本という架空の人物への怒りと憎しみが、大石本人にとっても迫真のものになり、ついに彼らの幻覚を見るまでに強い興奮をおこした点が、並のヒステリーとちがう。

大石は、最初自分の作りだした嘘を、いつのまにか本当にあったことと信じてしまっている、つまり精神医学でいう妄想をいだくようになったというのが、私がえた結論である。

いったいに妄想という現象は精神医学の中でも、一番ややこしい議論のある領域で、それを論じるだけで大部の著作が必要になるくらいだ。が、今は、妄想が、現実にはありえないような誤まった信念が、周囲の人びとの反対や訂正にも抵抗して、強固に持続する状態だと、ごく大ざっぱに定義しておいて話を先に進めたい。

大石光雄の場合、どのようにして嘘が妄想にまで発展したのだろうか。まず推測されることは、最初は、判事や検事をあざむこうとした嘘が、反復主張しているあいだに自己暗示によって妄想確信へと変っていったことである。この変化を実現させたのは、大石のゆたかな空想力であった。彼はもともと、巧妙な語り口で人をだます詐欺師であり、起訴事実にある詐欺事件も、舌先三寸で三十五万円もの金をだまし取っていた。

さらに推せば、大石は無罪妄想を信じなければ、自分が生きていけないこと、彼の将来に確実に到来する死刑への恐怖を忘れられないことを知っていたであろう。自分を冤罪と信ずることによって、つまりヒステリー性の反応に逃避することによって、彼は何とか身に迫る危険から自分を防衛していたと思われる。

もともとヒステリーとは、人間が自分の意思で自分を統一できなくなった場合に、意思をくもらせ、一段も二段も下の原始状態に逃避することである。ヒステリーは子宮を意味するギリシャ語から来た言葉で、本能をやどす体の部分が、ある女性を全的に支配してしまふ病変を示す言葉

である。しかし、本能に支配されるのは別に女性のみでなく、男性にもみられるところから、ヒステリーは男女ともに、退行に逃げこむことによって自分の防衛をおこなう状態を指す言葉へと拡張解釈されるようになったのである。

その後の経過を追っていくと、大石は、私が彼の妄想を信じているふりをするとき、よく、すこしでも疑う素振りをみせたり、犯行の動機や事件前後の行動について尋ねると不安な様子となり「忘れた」「わかんない」を繰り返した。そして、内海や幹本の名を口にするとき、しばしば激しい憎悪をむきだしにし、顔をしかめて歯ぎしりをした。言わばこの憎悪が、彼の精神生活を何とか安定させている原動力であり、憎悪の表出のあとは、けろりと上機嫌になり、他の患者たちと冗談を言って笑ったり、キャッチボールや将棋に興じたりした。

が、ときとして精神の安定がくずれ、極度の不安興奮に入ることもあった。とくに私が彼の妄想をつきくずそうとして、いろいろ意地悪い質問を浴びせたあとなどがそうで、いきなり立ちあがって手を後にまわし「さあ、縛れ。おれを横浜の内海のかくれ家へつれていけ。おれは奴に殺されても、この身の潔白を示してやる」と大見得をきったことがある。

私は、努めて彼の妄想を認めるふりをして、話を聞き出すことにした。大石は静岡の在郷で生れ、農業のかたわら製紙業を営む家庭に育った。郷里の高等小学校を中位の成績で出てから、家事の手伝いをし、村の模範青年と言われた。青年学校でも生徒長をして友人の信望も厚かった。